



山口善紀さんと紀美子さん。厚真町のハスカップ物語は、この二人から始まっている



旬が極端に短いハスカップ。時期をずらして出荷できるように、在来種を含め約20種類を栽培している



畑には、移植した当時の原木も植えられている

一軒のハスカップ農家から物語は、はじまった  
ビタミン豊富で不老長寿の果実ともいわれるハスカップ。厚真町はその栽培面積および生産量日本一を誇り、毎年7月には全国からハスカップ狩りを楽しむ多くの人が訪れる。このハスカップが町の特産品となり、全国にその名が知れ渡るようになった背景には一軒の農家の存在がある。

多くの厚真町民が野生のハスカップ株を自分たちの土地に移植。当時、主に稲作を営んでいた山口善紀さんの母親もその一人だった。幼少時代の善紀さん兄弟は、苦い実がなる樹を見つけては母の紀美子さんへ伝え、紀美子さんはその樹を抜いていった。それは「甘い実のつく樹だけを残そう」という算段からだった。他の農家に「苦いのがハスカップだべ、もったいない」と呆れられながらも信念を曲げず20年以上続け、いつの間にか山口農園のハスカップは、大きな甘い実だけをつける安定した品種へと進化を遂げたのである。

※苫小牧から厚真町一帯に広がる勇払原野は、かつて釧路湿原、サロベツ原野とともに北海道の三大原野と言われていた。

厚真町を「日本一」のハスカップ産地にしたい  
2005年に正式に就農した善紀さんは「厚真町を日本一のハスカップの町にしよう」と誓う。「品質は国内随一という自負はありました。それを伝える近道が栽培面積と生産量を日本一にすることだったんです」。あつまみらいと「ゆうしげ」、2種のハスカップを正式に品種登録し、「苗を町外に出さない」という条件付きで町内農家に増殖を許可。自身で独占して利益を得るより、ハスカップを普及させ故郷を元気にする道を選んだ。その選択が実を結び、2013年には町内のハスカップ農家は96軒にまで増加。遂に厚真町は栽培面積日本一の座を獲得し、後に生産量でも日本一となった。さらにイベントがあれば出店し、スムージーなどでハスカップの美味しさを伝え続けたという。その後の人気ぶりは道内にとどまらず、道外有名百貨店の物産展からも声がかかるまでに。善紀さんは品種登録をした時と同じように、自身の利益のためではなく厚真町の未来のために日々奔走している。



イベントで大人気のソフトクリームとスムージー

### ✕ After Story ✕

北海道胆振東部地震では、厚真町で栽培されているハスカップの約4分の1に当たる約1万1千本が被害に。避難所生活を送っていた善紀さんは、地震から2週間後に催された物産展に「町を元気にしたい」と出店。その後も全国の物産展やキッチンカーでのイベント出店などを通して、意欲的にハスカップをPRしている。新たに植えられた約5千本の苗木とともに、町内農家一丸となって真の復興へ向けて邁進中だ。



全道・全国への夢を乗せて走り続けるキッチンカー



加工品には、生産者みんなが誇りを持って使えるよう、厚真町のシールが貼られている

# まちぐるみの 取り組みを導いた ハスカップ農家の情熱



### ハスカップファーム 山口農園

住所 勇払郡厚真町宇隆163-5  
TEL 0145-27-2137  
URL <http://www.hasukappu.com>

山口農園 山口善紀さん(中央)と厚真町のみなさん